

彼を中心として広がり、藩医学校「好生館」に繋がるのである。彼についても著者は、本誌第四十四巻第三号(平成十年)に詳述している。

著者茂春氏は、初代道可の三男清左衛門(儒学者、直系であるが、この血統からも「相学提要」の著者中山(岩村)圓平、新政府側の医師として、戊辰戦争に参加した元朴(著者の曾祖父)の弟がいる。

時代は下って著者の祖父中山石庭(一八七〇—一九四五)の妻ツツの実家は蒲池家で、この家系からも現在に至るまで多くの医家を生んでいる。石庭の長男は弘道で、九大医学部出身で、福岡市で盛業の医師であった。なお弘道の長男和道は久留米大学第二外科の教授であった。

石庭の次女路は九大第一外科助教教授であった鳥巢太郎に嫁している。鳥巢家からも要道(福岡県中間市立病院院長、岳彦(大分医大教授)が出ている。

この中山家とは別に、著者の母堂の実家豊前中津藩の晴野家、さらに祖先で繋がる小笠原家、前述の蒲池家、著者夫人の実家鶴田家、母方の曾祖母の実家平野家と、尽きることはない名家、名医の大樹の枝が繁茂している姿が続く。

筑後には江戸時代種痘をこの地方で実施した緒方春朔や、幕末の幕府奥医師として名を馳せた高松凌雲など英明な医家が見られる。

しかし、それにもまして中山家の繁栄振りには、筆舌に尽くし難い圧倒的な叡智と力を感じる。日本全国には医家の名

門は数々あるが、未広がり代を追うごとに大きくなる家系は稀である。そういう意味でも、名門医家の研究には欠かせない著書と言える。

本書の途中には、息抜きに著者が書いた、中山家にまつわる医学史の小論文が挿入されていて、それぞれが価値ある読み物となっている。

なお、中には久留米市文化財となっている「相学提要」が、現代語訳とともに掲載されている。好事家にとって便利であろう。

(小林 晶)

〔唐津第一病院・唐津市朝日町一〇七一—四、電話〇九五五—七二—二三九〇、平成十一年十一月三十日、B6判、二七六頁、非売品〕

二宮 陸雄 著

『医学史探訪 医学を変えた一〇〇人』

著者は一九五四年生れの東京の開業医であるが、活発に医学史関係の著作を発表されている。この本は『日経メディカル』の一九八八年以来の連載をまとめたもので、古代から現代に至る欧米・アジア・日本の一〇〇名の医学者・医師を、その業績を中心に紹介しているが、とくに欧米の医学者が多い。原則として、一話題に二頁を充て、三〜四枚の写真が添えられている。

掲載された写真には、その医学者の著書、あるいは関係した書籍の見開きが多く含まれている。一六世紀以後のそうした書籍の大半が著者の二宮陸雄氏の所蔵であり、著者は欧米の古典医学書の秀れたコレクションを持つてることが判る。

この本に収載されている医学者・医師は、ヒポクラテス、プラトン、アリストテレス、ガレノス、ギユイ・ド・シヨールiak、パラケルスス、コペルニクス、パレ、ヴェサリウス、サントリオ・サントリオ、ハーヴェイ、デカルト、シルヴィウス、ブルーフ、ハレル、ハンター、ジェンナー、ラポアジェ、フーフエラント、ビシャ、ピネル、ラエネットク、ブライト、ホジキン、アジソン、ゼンメルワイス、フィルヒョウ、パストウール、ベルナール、シャルコー、リスター、ロカ、ビルロート、フロイト、コッホ、エールリッヒ、アシヨッフ、クツシング、フレミングなどである。代表的な欧米医学史上の人物については、ほぼ網羅されているといってもよいだろう。それに加え、パドヴァ大学、ペスト塔など、若干、人物以外のテーマで纏められた項もある。

人物のエピソードに焦点をあて医学史を紹介する方法は、一般の読者にとって、理解しやすく、読みやすい著者にとっても、書きやすい。また豊富な、とくに現地で撮影した医史跡に関する写真が添えられているので、これから医学史に興味をもとうとする読者にとって、とくに有意義な本となっている。

あとがきの中で、この点について、著者はこのように述べている。「このごろ日本では、当然のことながら、日に日に進む医学の急速な歩みを追うことに力を注ぐために、後をふり返る医学史は等閑に付されています。そればかりでなく、いまや神の世界に手を染めつつある現代医学の世界に新たに入ってくる若者たちが、古典を知らず、文学を読まず、哲学から遠ざかり、ひたすら実学の実利性に、埋没していることは、由々しき事態であろうと思います」。この著者の意見に評者はまったく同意する。こうした由々しき事態を少しでも良いほうに向けるために、この本は医学史に興味を持つ医師の裾野を広げるといふ点で、大きな意味があると思う。

細かい点であるが、若干気になる点を指摘しておく。名前の表記方法はおおむね妥当であるが、一部、違和感を感じさせるものがある。それは例えば、ブルーフ(フルーフ)エ、ブルーフエが標準的である。また、解体新書の原著者「クルムスはドイツのダンチッヒの解剖学者」とあるが、クルムスがドイツ人であるとしても、ダンチッヒ(現、グダンスク)は当時もポーランド領であったし、また彼はギムナジウムの医学担当の教授(内科医)であり「解剖学者」とするのは、すこし無理がある。またこの本が一般書であるという性格上、厳密な先行文献の明記は必要でないが、ペスト塔の項での村上陽一郎氏の先行文献の紹介があっても良かったのではないか。次に、古代ギリシア文化圏の病院が「アスクレピオス」と表現されているが、アスクレピオスは医神の名で、施設名

は「アスクレピオスの神殿(神域)」、あるいは「アスクレピイオン」とするべきである。

(石田 純郎)

〔日経B P社 東京都千代田区平河町二一七―六、電話〇三―三三三八―七二〇五、平成十一年十一月一日、B5判、二三〇頁、本体価格二、八〇〇円〕

鹿子木敏範 著

『落葉集』

昨年末に鹿子木敏範氏のこの二冊の本を初めて手にしたとき、さまざまな思いがこみ上げてくるのを感じた。長く誇り高い歴史を持つ表題は、この著作集にいかにもふさわしい。かつてイエズス会士が一五九八年、長崎で日本語の字典を刊行した際、『落葉集』の名をつけたのもうなずける。ちなみに、表題をそのまま西洋の言葉に訳しても、その诗情豊かな響きが失われないことも付け加えたい。また、鹿子木氏の書かれたものは、その大部分が日本の伝統に拠っていないがらヨーロッパ人、特にドイツ人に大いに語りかけている気がする。

第一巻は六七五ページで「癒しと時代のこころ」、第二巻は二五七ページで「翻訳・ドイツ語編」という副題がつけられている。二巻とも美しいハードカバーで装丁され、手を触れるだけで心地よさが伝わってくる。

鹿子木氏の執筆活動は実に広範囲にわたっている。第一巻に取められている三〇の論文は精神医学、医史学、文学(病跡)、文学(その他)に分類され、さらに論文の他には一四の「コラム」も掲載されている。最も初期の論文は昭和四一年のもので、最新のものは六年前に書かれたものである。個々の論文の内容についてはここでは触れる余裕はないが、筆者が興味を持った点を中心に、本書の豊富な内容を概観してみたい。

まず面白いのは、これらのすばらしい作品のいくつかが、独特の経験や観察をもとにしていると思われることである。例えば偉大な精神科医フィリップ・ピネル(Philippe Pinel)の生涯と業績を詳細に追究した論文は、一九六一年、サルペトリエール病院の古い講義室の絵に出会ったときの感激から生まれたものである。その次に目にする「日本人の精神的伝統」に関する考察は、鹿子木氏によると、「日本人の罪の意識を調べていた時の副産物」だということである。また、かつて世界を席卷し、ヨーロッパをも巻き込んだ、イスラエル人ユリ・ゲラーの「スプーン曲げブーム」というのがあったが、当時の世相を反映している「超感覚考」は、今日再浮上した超能力ブームを考える上でも非常に興味深い。

文学者に大いに刺激を与える「文章の心理と病理」は、六〇・七〇年代にドイツで盛んだったヘルダーリン論争を思い起こさせる。「テレノバツハ教授との二日間」の中の夕暮れの雰囲気の描写には、繊細で几帳面な「マンハイム観察者」と